

日光のむかしばなし ⑱

●有宇中将物語（ありうちゅうじょうものがたり）つづき
 長者と姫は、家来を連れて行くようにと言いましたが、中将はそれをごとわり、来たときと同じように、青鹿毛と雲の上と悪太丸を連れて行くから心配ないと言いました。それでも心配な姫は、二人のおびをとりかえ、はしをむすびました。それは、どちらかに大変なことがあったとき、そのむすびめがとけて、相手に知らせるといふまじないでした。

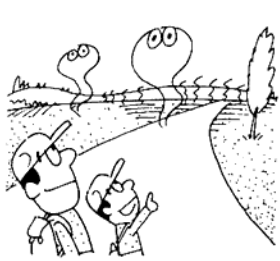


陽災（かげろう）

今更に 雪降らめやも
 かぎろひの 燃ゆる春へと
 なりにしものを
 いまさら雪が降ることがあるうか。陽災の燃え立つ春となったのに、というのが大意です。陽災は夏のほうがよく見られますが、俳句では春の季語です。
 日当たりのよい野原や海岸、舗装された道路などで遠い物体が細かく揺れたり、形がゆがんだりして見えることがあ

また姫は出かけようという中将に「途中に大きな川があります。その水を飲むとふたたび好きな人に会うことができると言います。ですから、どんなことがあっても、その川の水は飲まないでください」と言いました。
 中将は旅を続け、大きな川のそばまで来ました。のどがかわいて死にそうでした。姫の言ったことを忘れたわけではありませんでしたが、どうしてもがまんできず、その川の水を飲んでしまったのです。すると、たちまち体が弱ってしまいました。それでも青鹿毛に乗り、旅を続けました

が、日光山のふもとについたときには、もう動くのがやっとならなくなった。さいごの力をふりしぼり、二通の手紙を書きました。
 一通は、青鹿毛の鞍にむすび、都の父母へ、もう一通は、雲の上の足にむすび朝日姫のもとへとどけるよう、たのみました。悪太丸だけが、中将を見守っていました。
 朝日姫は、自分の体につけた中将のおびのむすび目が、ひとりどけたのを見て、中将の身に何か大事なことが起こったことを知りました。
 姫は中将の後を追って旅に出ました。すこし行くと、雲



た様子が、陽災のようにひらひら、ゆらゆらして見えるためこの名がついたともいわれています。
 とところで、四、六月は、「春の都市緑化推進運動」です。都市の緑化の大切さを認識し、みんなで身の回りの緑を守り、増やす努力をしたいものです。

◆現金寄付 ●いちいの家に
 野沢光枝（稲荷二）二千元
 （二月一日～二十八日扱い分）
 （敬称略）

おこころざし
 ありがとうございます
 ごさいました



子どものための
 日光のむかしばなし
 八木沢 亨著

の上が飛んで来て、中将の手紙をどけてくれました。姫はすぐに返事を書き、雲の上に持たせると、中将のいる日光山を目ざして急ぎました。
 都では、中将の母が死んで悲しんでいるところへ、青鹿毛が中将の手紙をどけて来たのです。手紙を読んだ父の大將は、中将の弟の中納言を青鹿毛に乗せて日光山へ行かせました。
 青鹿毛は空を飛ぶように速く、夜も休まず走り続け、日光山へつきました。しかし、中将はすでに死んでしまったのでした。そこへ、雲の上が朝日姫の手紙をどけて来たので、中納言は姫が日光山へ向かって急いでいることを知り、むかえに行き、と中で会いました。 つづく

親と子のサークル

とんがりぼうし会員募集

匿名 千円 ●キスゲ作業所へ 時遊館（石屋町）四千八百円 ●下野三楽園へ 匿名 千円 ●交通遺児へ 山田春子（所野）千円 ●身体障害者へ 匿名 一万円 ●日光地区痴呆性老人問題シ 十枚

ンボジウムへ 日光ロータリークラブ 十万円 ●物品寄付 ●社会福祉施設へ 工藤勇二（東京都）リンゴ二十五箱 ●身体障害児（者）へ 鶴島アヤ（安川町）おしめ二枚

幼稚園に行く前の子どもを持つおかあさんたちが、子どもと一緒に（他の子、他のおかあさんたちとも）遊べたらと思い週一回、手作りのコミユニケーションの場を開いています。
 みんなで、リズム遊びをしたり、踊ったり、歌ったり、おもちゃを作ったり、料理したり、お絵描きをしたり……

おかあさんたちが、どんなことをするかを決めて、その準備などをして楽しんでいきます。
 ◆日時 毎週木曜日 午前十時三十分～正午
 ◆場所 中央公民館視聴覚教室（変更あり）
 ◆会費 百円（材料費など）申し込み・問い合わせは、中央公民館（☎五三二七〇〇）へ。

春のチャリティ山草展

期日 4月15日(金)～17日(日)
 場所 日光郷土センター



月日	医療機関名	住所	電話番号
4月3日	古河記念病院	安良沢	53-2215
4月10日	小泉内科クリニック	久次良	53-3555
4月17日	岡 医 院	下鉢石	54-0218
4月24日	河合耳鼻咽喉科	石屋町	54-3002
4月29日	高野内科	和 泉	53-5311